
ある日の夜

快ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日の夜

【Nコード】

N3746B

【作者名】

快ちゃん

【あらすじ】

『傍に居るから…。』の前のお話。のつもりで書きました。短編としても読めると思います。快新とも取れますが、『傍に〜』は一応、新志です。http://ncode.syosetu.com/n6081a/も、時間の空いた時呼んで下さいね。

ある日の夜　　（新一）

小さな音だったはず。だけど、こんな静かな夜には十分過ぎるほど大きな音にも聞こえた。

1つの影がふわふわと絨毯に映って『時間』がわかった。

窓が開けられて、カーテンがふんわりと空気を入れ替える。

「窓：無用心ですね。泥棒が入って来てしまいますよ？気を付けて下さい。名探偵。」

家に帰ってきてまず言う台詞は普通『ただいま』ではないか？ああ、でも、自分も『ただいま』

とは言わずに『腹減った』だの『疲れた』というときもある。

「……………掛かっていただろ？」

呆れて物も言えないが一応言っておくべき事なのだろうな。と、自分に言い聞かせてみる。

「掛かっていましたよ。」

「幾つ？」

溜め息とともに吐き出した言葉。

「3つ…」

「窓に3つの鍵が掛かっているのに、それを『無用心』と言われるのは心外だ。」

玄関のカギが開けっ放しならともかく！と付け加えるのも忘れないところは結構、自分も

楽しんでいるのだろうと思う。

「今の泥棒さんを甘く見てはダメですよ。」

チツチツと人差し指を差し出し左右に振った。

「あのなあ、ベランダも無い2階の窓に3つの鍵が掛かっていれば普通の泥棒はいらねえ！」

普通では入って来られない窓から入ってきた侵入者を睨みつけても結局笑っている憎たらしい顔。

「此処にいますが…」

「『普通』じゃねえからな。」

「冷たい事を言う。それにしても……こんな暗い中で読書は目を悪くしてしまいますよ。」

長くて、細い綺麗な指が本の上部を掴むと本の重さを感じさせないで、手の中から無くなる。

また…だ。何気ない心遣いを感じる。

幼児化した時から何度か対面したがその時でさえふとした優しさを見せていた。

17歳に戻った体は通常の発達をしているが、何時、どうなるのかは誰にもわからない。

このままの進行を続けるかもしれない。

一気に2年分を埋める速度の発達があるかもしれない。

そして、再び幼児化する可能性も。

そんな事を全て知っているうえで小さな優しさを何度か見せる。

食事、睡眠、探偵活動。全てに置いて遠くから見守るように……。

「返せよ。今日は月明かりがあるから電気なんていらねーし、もう寝るところだったんだよ。」

目が悪くなるからと、取り上げられた本に手を伸ばして返せと主張。

「大体、お前の部屋はこの部屋の向だろ！毎回言っているがこの部屋を通り道に使うな。」

KIDの手の中に今だ収められている本に手を伸ばして取り上げて要件のみで終わらすつもりだった。

「……今日も違った、だろ？さっさと渡して早く寝ろ！」

テーブルの上におかれた『要件』は見て、と言わんばかりに一転がりした。

視界にそれを入れて溜め息もつきたいぐらい。

「どんなのだかわかんねえのに…探すのって難しいよな。推理も出

来やしねえ」

別に、俺が探すわけではないけど。ましてや、一緒に探してやるわけでもない。

「きつと…蒼い…。」

ふいに言われた言葉に多分、眼がまん丸になったと自分でも思った。「どーして？しってんのか？」

「知りません。」

組んだ足をプラプラと上下に揺らしながらの能天気な声。

「はあ？お前、なめてんのか？」

「……願望ですよ。蒼だったらいいなあ。とね。」

「如何して蒼がいいんだ？宝石って言ったら赤とか…無色とか…」インディゴライト…アズライト、ソーダライトとか？トルコ石、つーのは在り来たりだしな。

ラリマー位なら俺も結構…。ん？でも、宝石の名前がわかってんならこんなに苦労もしない…か。

ふと頭に浮かんだ宝石を並べて検証してみた。

「同じだから…。名探偵と眼の色が同じでしょ？プレゼントするに最高かと。」

眼？瞳？何だそれ？

結構真剣に考えていた分腹が立ち、眼前の意味不明な言葉を発した人物に自分の中での

『禁句』を告げた。

「バーロ。そんなんプレゼントされても嬉しくねーよ。大体俺は宝石なんて興味はねーし、それを

欲しがる奴の気持ちがわかんねー……………」

『後悔先に立たず』とは、こういうときに使う。

「……あつ、俺…その…ワリイ……」

その言葉の続きを見つけるために…そんな事を望んではないのだろうと。思うけれど、

何時ものように流せない自分に怒りさえ覚える。

K I Dの動く気配を感じた瞬間、頭に：髪に優しく触れる感覚。何時もなら、払いのけられる。けど、それさも出来ない。

きつと：傷つけた。色んな思いが頭を駆け巡る。

如何して、欲しがっているか。

如何して、蒼が良いのか。

何を求めているかなんて知っているはずなのに。

俯いたままぎゅっと目を瞑った。

突然、引っ張られる頭に目を開けたら視界が一瞬で真っ暗になった。いや、本来の色は白だけれど、近過ぎるとそれも黒になる。

K I Dの脇に手についてK I Dの胸に腕に収まっている事に気付いて抵抗した。

「お、おい。何しやがる。」

必死の抵抗も一回り大きい体に何の対処方法もない。

「おい！！K I D！！テメエ、いい加減離しやが……」

「……………ね。」

「え？」

眩きにも似た声に動きを止めた。如何…して？

聞き間違いかと、思ったけれど、直ぐに降ってきた言葉に、間違いないと認識させられた。

「ごめんね。悪くないよ。捨てていい…よ。」

「な…に…？」

如何して？

「苦しまないで…いいから俺…を捨てて。」

少し息苦しかった感覚がなくなってK I Dの両手が肩に掛けられた。如何して。如何して？何を言っているんだ？

K I Dであるこの男は何時も、本心を言わない。

辛くないのか？疲れないのか？苦しくないのか？何時もそう思った。けど、言わなかった。

K I Dが何も言わないから。

それは、言っではいけない事だと…思った、のに。

お前が――…言わせてくれないから――…。

「……名探偵？」

此処で、言わなければ！と思って顔を上げた。

「っ！いっつつつつてー！ー！ー！ー！」

部屋中に響く声を頭上で聞きながら自分も言葉を失った。

後頭部に感じる痺れ。

あの角度だと、自分は後頭部で相手は顎と判断した。

直ぐに可笑しそうに笑う声が聞こえてきた。

「何、笑ってやがる。大体、てめえのせいであ、」

「そんなこと言っても、急に頭上げるなんて、そんな事予想しませんって。」

動物を撫でるかのような手を払いのけて胸座をつかんだ。

「お前がばかな事ばかり言うからだろ？大体なあ、『捨てて』ってなんだよ！急に『ごめん』とか

って………言うんじゃねえ。バーロ。」

KIDは『ごめんね』としか言わない。

何を言えばいいのだろう。どうしたら一番いいかなんて…解からない。

胸座から手を離して、手持ち無沙汰に本を掴んだ。

「俺は…簡単に物を捨てられねえからな。一度拾ったものは捨てない。苦しんでなんかもいない。

……お前…俺の事…解かれ。バーカ。」

言って、意味がわからない。自分でも…こんなに言葉が重く感じるなんて…。

「……名…探偵」

「バーカ。バーカ。バーカ。」

「……俺…IQ400…。」

「それでも馬鹿だ。だから……余計に…捨てられねえ。」

「……じゃあ、…捨てないで下さい。これからずっと…持っていて。離さないで…いて下さい。」

多分…ではなく、初めての本心だったと思う。

「知るか！寝る！！！」

やっぱり、如何して良いのか…解からなかった。それでも、K I Dはわかってくれるような気がした。

胸元を蒲団の上から撫でられてどうしようもなく、恥ずかしさが募る。

「やめろって！ガキじゃねえんだから、そんな事しなくても眠れる、つーの！」

文句を言っても、K I Dはやめないのだ。それが嫌なわけでもない。均一なリズムが続いていてもK I Dは無言。

何を考えているのか解からないから、適当に…多分…と思った事を聞いてみた。

「……なあ。」

手が止る。

「何です？名探偵。」

直ぐに同じリズムが戻って来た。

「多分だけど…違っているかもしれないけど…」

「はい。」

「お前、くだらない事考えてない？」

「……………くだらない事ですか？」

「んー。お前がK I Dで俺が探偵とか…………」

「……………考えていませんよ。」

「そっか？」

「そうです。」

やっぱり、わかんねえ。こいつの考えている事なんて。

だから、自分の思っている事言ってみよう。それで納得しよう。

「……雨が降らないといいと…思ってる。」

「どうしてですか？私は構わないですよ。」

水も滴るいい男。

「……………気障。俺と同じ顔してそーゆうこというな。」

「名探偵もいい男って事ですよ。」

「バーロ。」

「で？どうしてそう思うのです？」

「……綺麗……だから。お前、月、似合ってるし、たまに、本当に、鳥みたい、って思う。」

呆れられるかな。笑われても良いや。思ったことだし。

だけど、返ってきた言葉はそうじゃなかった。

「それは、どうも。でも……鳥はね……殆どの鳥は普通夜には飛びません。私は偽者だから。」

「偽者とか……本物とか……わかんねーけど。それはお前にとって重要か？飛べるのは本物じゃねえと

ダメなのか？」

「重要じゃない……かな。人は人でしか在り得ないからね。」

「俺ってさ……『探偵』だろ？」

「はい。泣く子も黙る、東の名探偵『工藤新一』」

「お前……『KID』だろ？」

「そうですね。泣く子も黙らない、国際指名手配犯『怪盗1412号』又の名を『怪盗KID』。」

「……そーだよな。」

そっか。そうだよな。俺は探偵でKIDは怪盗。だから、いいんだ。それなら、自分は自分であれば良い。そう思って眼を閉じた。

「飛んでいいぞ。好きなだけ。飛んでいろよ。」

へ？みたいな言葉でちよっと間抜けな声が聞こえた。

「私を逮捕するのでは？」

「するさ。俺、犯罪者許さねえもん。」

何か、言葉が軽い。するべき事がわかったから。

「それまで？」

「ああ。それまで。」

「真実……が……見付かるまで……な。」

いい終わらないうちに体に微かな重みを感じた。決して重くはない。

「何してんだよ。重いって。」おい。聞いてつか？
やっぱり解からない。こいつのする事は何時だって。

何を言っても動かなくて、多分、今は、こうする事しか出来なくて。
背中をポンポンと叩いてやった。

「子供では在りません」と苦笑いが飛んできて、「「K I D」だろ？
」子供じゃん。だから良いんだよ。

この鳥は何時まで飛び続けるのだろうか。『逮捕』するのは自分であ
って欲しい。

『逮捕』したいのではない。と思う。早く…早く羽を休ませてやり
たいと、そう思っている。

多分……。だけど…この鳥は…自分の想いを…何時か裏切るかもし
れない。

『K I D』と『黒羽』の境は何処にあるのだろうか。

話し方と格好が違うだけであって…同一人物。『探偵、工藤新一』
と『一般人、工藤新一』が同一人物

であるように…。

飛び立つ度に思う…どうか…捕まらないで…。どうか…雨が降った
り…強い風が吹いたりしないで…

と。正義の味方である探偵が何故、そう思うのか？何時も何時も考
える。

飛んでいくのは『怪盗K I D』だというのに…。『黒羽快斗』が重
なる。

同情しているのだ。と。言い聞かせもする。その後で後悔もする。

俺は『探偵』なのに。と。

正体をばらしに来てから何度も、何度も同じ質問を繰り返した。今
の様に……。

何時も決まって、答えは出ない。俺は一体如何したいのか？そして、
答えは何時、出るのだろうか。

暫くその状態が続いてK I Dは体を離した。

「……………名探偵……」

少し戸惑ったような音量に間合い。

「んーだよ。」

「ジャンプの匂いが女史と同じ。」

如何して?と思った瞬間に顔に血液が集中していくのがわかった。

「お、お前、如何して、んーな事知ってんだよ!!」

ベッドから飛び降りた怪盗は営業スマイルなんて見せている。

「企業秘密デス。」

「な、なっ、」

血圧が一気に上昇する。それに何を言っているのかさえも。

言葉で何も言えないなら、残るは物を投げつける事。

「ちよっと。危ないでしょ?」

危ない。という割にはギリギリの所で向かってくるものを避けている。

視界の淵にキラリと光る本日の獲物と厚みのある本を捕らえた。

こんな時でさえ、結構冷静に物を判断できると言うのは結構なことだ。

次に手にとったものをKIDがみると、部屋から寝る前の決まりごとを口にしながら素早く退散した。

それでも勢いは止らなくて閉められたドアに大きな音を立てて絨毯の上に落下した。

暫く血圧の数値は高いままだろう。

今、検診があったら隣家の有能な彼女は静かにその相手を叱り付けるだろう。

くだらない仕返しの方法を考えて少し血圧が下がったところでベッドに潜り込んだ。

(後書き)

投稿しようか迷っていた作品です。

あまり本文(傍に〴〵)とは関係無いのですが、御感想頂けたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3746b/>

ある日の夜

2011年10月2日22時44分発行